

第一回

これからの

教育相談と考える



会沢 信彦

文教大学教育学部准教授

今号から一年間、「教育相談の心、技、ゴール」というテーマで連載を書かせていただくことになりました。

この連載が少しでも先生方のお仕事のお役に立てばと願っています。忌憚のない御意見、御感想を編集部までお寄せいただければ幸いです。

一 生徒指導と教育相談

— 教育相談の永遠の課題 —

教育相談にとつての永遠の課題、それは、「生徒指導との関係をどう捉えるか」ではなからうか。

学校現場においては、教育相談と生徒指導とが対立的なものとして認識されていることが少なくない。つまり、生徒指導と教育相談では、その対象と指導方法が異なると考えられているのである。

まず、対象については、基本的な生活習慣

の問題や校則違反、さらには非行など、行動上の問題は生徒指導だが、不登校や摂食障害など、どちらかといえば「こころ」に関わる問題は教育相談、と考えられている。一方、方法については、生徒指導は毅然とした姿勢で厳しく指導するのに対して、受容的、共感的な態度で、子どもの立場に立つてあたたかく支援するのが教育相談であるとされている。

しかし、本当に生徒指導と教育相談とを区別することは可能なのだろうか。しばしば見受けられるのが、表面的には非行や暴力などの行動上の問題を引き起こしている子どもが、よくよく調べてみると、その背景には不適切な養育環境に基づく「こころ」の問題を抱えている、というケースである。このような子どもの場合、問題行動に対しては生徒指導的に毅然とした対応を行うと同時に、一方では彼・彼女の傷ついた「こ

ころ」にも目配りするような教育相談的なアプローチも必要であることはいうまでもない。この両者が相まってこそ、彼・彼女の成長と自立を促す指導や支援が可能となるのである。

そう考えると、生徒指導と教育相談とは決して相反するものではなく、両者が一体となつてはじめて指導・支援の実を挙げることができると考えられる。つまり、大切なのは「その児童生徒の成長や自立をいかに支えるか」なのであって、そのためには、生徒指導であっても教育相談であっても構わないのである。その点で、極論かもしれないが、筆者は、「生徒指導」「教育相談」という概念の再構成が必要であるようにも感じている。まったくの私案に過ぎないが、たとえば、最近多くの教育委員会組織名として使用されている「児童生徒支援」という名称で、生徒指導と教育相談とを統合できないだろうか、などと夢想するこの頃である。

二 特別支援教育と教育相談

— 教育相談の未来のあり方 —

生徒指導とともに、教育相談と密接な

かわりを持つのが特別支援教育である。特別支援教育の考え方が浸透するに伴い、これまででは教育相談や生徒指導の対象とされていた児童生徒の中に、その背景としてLD、ADHD、高機能自閉症、アスペルガー症候群などの発達障害がある者も少なくないことが明らかとなってきた。

たとえば、ある特定の教科の学習だけが極度に苦手なLDの子どもが、努力不足と見なされて教師から強い叱責を受け、それが原因で不登校になることがある。また、衝動的に行動してしまうADHDの子どもが、やはり理解のない教師から繰り返し叱責されることで教師との折り合いが悪くなり、反抗的な態度を取るようになるということもあり得る。さらには、対人関係が苦手なアスペルガー症候群の子どもが学級の中で孤立し、不登校に陥るといったケースは珍しくない。

このように、発達障害の存在は、学習上の問題や社会性・人間関係の問題として表面に現れることが多い。さらに見逃してはならないのが、それらの問題に対して周囲（教師、友人）から否定的な評価を受け続けることに伴う、自尊心の低下である。

このうち、社会性・人間関係の問題と自尊心の問題は、まさに従来教育相談が取り組んできたテーマそのものである。たとえば、学級における社会性の育成を目的としたソーシャルスキル教育、人間関係づくりを目的とした構成的グループエンカウンター、そして、自尊心の向上を目的とした「いいとこ探し」のエクササイズなどは、教育相談の得意領域である。そして、特別支援教育においても、まさにこのような取組が求められているのである。

先ほど筆者は、生徒指導と教育相談とを統合し、「児童生徒支援」（仮称）とする必要性を指摘した。そして、その次の段階としては、特別支援教育と「児童生徒支援」との概念整理が求められるように思われる。また私見ではあるが、すべての児童生徒を対象とした「児童生徒支援」の一環として、障害のある一部の児童生徒を対象とした特別支援教育が存在する、というような位置づけもあり得よう。

三 教育相談の「心」「技」「ゴール」

ところで、筆者は、優れた教育活動には、欠かせない三つの視点があると考えている。

第一の視点は「善き心」である。子どもたちの健やかな成長を願う心を持たずして、優れた教育活動などできるはずがない。

第二に、「優れた技」である。しばしば見受けられるのは、子どもに対する愛情は十二分に持ち合わせているものの、残念ながらやや教育技術に欠ける教師である。その最たるものは子どもに対する暴力―一般には体罰と呼ばれる―であろう。

そして、忘れられがちなのが、「正しいゴール」である。いくら愛情あふれた教師が優れた授業を行ったとしても、目指すべき方向を誤ったとしたら、それは暴走以外の何ものでもない。

「心」「技」「ゴール」が相まって、はじめて優れた教育活動が成り立つ。次回からは、教育相談の「心」「技」「ゴール」は何か、読者とともに考えていくこととしたい。

〈参考文献〉

嶋崎政男『教育相談 基礎の基礎』

ほんの森出版